

## 研究者として、そして学問分野としてのサバイバル

(独)理化学研究所 丑田 公規



数年前 BNL の Wishert が来日したときに二人で日花をさぼって上野で花見をした。食事をしながら彼と放射線化学の「これから」を語り合ったが、Education だな、という話になった。彼のパルスラジオリシス装置には生物関係の共同利用研究者が増えて、そもそも放射線化学の初期過程を知ってもらうのに難儀しているという。放射線化学の学問体系や研究データの蓄積は人類にとって重要なもので、是非継承されていかねばならない。例えば優れた人材を育成して原子力の安全を確保するには重要な学問である。私は、生物関係の基礎科学研究者が、放射線化学のテクニクを使って、最先端の研究を進めていけば、是非放射線化学という学問体系を、そういう新分野の研究者に引き継いでもらうべきだと思っている。そして、現在直接我々が携わっている高分子や材料研究といった研究内容が、発展的に解消されても構わないと思っている。そういえば理研から「放射線化学研究室」が消えて 20 年足らず、自分は「最後の末裔」になってしまった。

研究は subject の消費であることを銘記すべきである。例えばゲノム解析を中心にした分野が、一時期は大きな繁栄を誇ったとしても、研究人口が集中して成果の消費が速くなり、分野の寿命も短くなる。そして「大体おしまい」となると、簡単には最前線の雑誌に載らなくなり、やる事がなくなり、予算がカットされ、若い人の職もなくなり……そういう結末に必ずなる。もちろん世間での存在意義も希薄になって税金の無駄遣いといわれるようになる。かつて Argonne の放射線化学研究室から太陽エネルギー関係の研究者が多数輩出されたようなケースはまれだろう。放射線化学も輝かしい時代があった。

Dimer イオンラジカルだって *Nature* 誌に載っている。しかし、すでに「大体おしまい」になった感は否めない。

ここで必ず「いや、基礎は 20 年ぐらいやって初めてモノになるのだ」などという使い古された反論が出てくるだろう。もちろんそうしてもらって構わない。ただし究極には予算ゼロ、人件費ゼロの覚悟をお願いしたい。20 世紀に基礎科学は未曾有の発展をしたが、近代工業化社会をパトロンにしていたからに過ぎない。量子力学もそうだ。放射線化学も原子力がバックにあったことは誰でも納得することであろう。ファラデーが貴族をパトロンにしていたのとそれほど変わらないのだ。学問体系の美しさに騙されてはいけない。その美しさだけでは、社会が研究費を与えるためのコンセンサスは得られないからだ。

放射線化学の知識体系や学問的価値、人々にインスピレーションを与え、新しい発見や医療や技術開発に結びつく価値は全く損なわれていない。ゆっくりではあるが、今も発展している基礎学問であり、私自身愛情もっている。それをどうやって守るかだが、誰かを当てにするのではなく、やはり自分たちで工夫するしかない。研究資金を別途確保し、そのコンプライアンスの範囲内で研究者生命を守りながら、蛍雪の光で書物を開くように基礎研究を続けていく覚悟はないのか？「論文が出やすいから、研究費が取りやすいから、放射線化学をやってきた」という立場の方も多いかもしれないが、私はいっこうに放射線化学分野の研究発表もしなくなり、論文を出さなくなった。しかし「研究費は取れなくなったが、価値ある放射線化学をもっと続けていき、次世代に継承してもらおう。」という考えではいる。誰かが悪いから、と基礎研究予算がこないことを嘆いているうちに、あっという間に定年になってしまう。Ars Longa Vita Bravis (芸術は長く人生は短い) である。愛すべき放射線化学をこれからも研究し、学ぶために、予算獲得は放射線化学にこだわらない、というような逆説的な発想で生き抜かないと生き延びることはできない。

そんなことを日々考えている頃、Wishert と話をし

Survival of Radiation Chemistry, as a Group of Individual Researchers, and as One Research Field  
Kiminori Ushida (*Eco-Soft Materials Research Unit, Discovery Research Institute, Riken*)  
〒351-0198 和光市広沢 2-1 独立行政法人 理化学研究所中央研究所環境ソフトマテリアル研究ユニット  
TEL: 048-467-7963, FAX: 048-462-4668  
E-mail: kushida@riken.jp

丑田 公規

て、Education という答えもあるかな、と思った。幸いすぐに市川先生の提案の機会を得て取り組ませていただいたのが「放射線化学のすすめ」の編集作業であった。数多くの友人のエネルギーや諸先輩の暖かい励ましで事業は何とか格好がついた。どうか、会員の皆様は、学会の外のあらゆる分野の研究者や技術者にこの書物を薦め

ていただきたい。放射線化学の知的体系の素晴らしさや重要性を次世代に継承していてもらいたい。今近代工業化や原子力分野の発展のめざましいインドと中国に学問を継承してもらってもよい。この書物の中国語訳が出版されるのを、何となく夢想している今日この頃なのであった。